

ミャンマー難民医療緊急救援プロジェクト

岩永資隆氏

6月21日から8月2日まで43日間バングラデシュに滞在し、難民キャンプにおける衛生教育法の改善を中心とした活動を行った。

キャンプの状況や難民の疾病構造などについては、前任までの先生方によって詳しく報告されているので、いわゆる文化人類学的な見地からの考察を行ってみたい。

【“Rohingya” (ロヒンギヤ)】

ミャンマーからのイスラム教徒の難民の民族名であるが、バングラデシュの人たちがその言葉を口にする時、それは一頃の日本語の「チョソンピー」に似たニュアンスを持つ。

「彼らはバングラデシュに来て初めて薬を口にするのだ。」

「自動車を見るのも初めてという人も多い。」

「日中、外に出る機会が多いと日焼けするので、皆から『ロヒンギヤ!』と呼ばれてしまう。」

「彼らはキャンプに居て、eating, sleeping and shitting の毎日だ。」

「大人1人、一日あたり 500gの米がもらえるから、ミャンマーに居た時よかよっぽど良い暮らしだよ。」

バングラデシュの一般の人々は、仏教徒に迫害されたイスラム教徒という意味では多に同情はするものの、階級制度の厳しいこの社会では、ロヒンギヤはその辺の道端に寝ている人たちとさして変わりのない存在なのである。

【文盲率94%】

これは出発前に日本で聞いていたロヒンギヤに関する一つの事実である。確かにこれは一面では正しい。私が現地のスタッフの協力を得て行ったアンケート (Haludiapalong Camp, Ukhya, July 31, 1992) でも、男性92人 (16才~85才) のうち、彼らの第一言語であるベンガル語が読めると答えたのは 3人 (3.3%)、女性は29人 (18才~60才) 中1人 (3.4%) であった。

しかしビルマ語については、男性92人中44人 (47.8%)、女性は29人中3人 (10.3%) が読めると答えた。この数字はバングラデシュの農村におけるベンガル語の識字率と大した差はないはずである。

キャンプ内では高い人口密度のために生じる様々な健康に関する問題がある。その一つにトイレの問題がある。キャンプ内にはCARE、UNICEF等が造ったトイレがあるが、難民はそのトイレをなかなか使用しようとしなない。トイレ建設の際には周辺の難民に、それを使用し、屋外では排泄しないように、あるいはサイフォン式トイレ (排泄物が溜まる空間が外界と交通していないタイプ) の使用法 (使用後、水で排泄物を落とし込む) などの説明もなされるが、新しいトイレが建設されて1週間後にそこを訪れてみると、便器には排泄物 (ベンガル語で『パイカナ』と言う) が山盛りになり、トイレの建物の周辺にはパイカナが散乱しているという状態である。トイレは衛生的な立場から、井戸や川などの水源から15フィート (約20m) 以上離れた場所に建設されている。ということは使用後に流すべき水を汲みに行くのが非常に面倒臭いことにほかならない。後には建設した団体もそれに気付いたのか、既設のトイレのサイフォンの部分を壊し、オープンタイプに改造してあった。このタイプは悪臭と害虫の進入を防止できないこと、幼児の使用が危険な場合もあるという欠点はあるが、使用不能になることが少ないため、多くの人にトイレを使用させるという目的は果たせる。

「トイレに行くときはサンダルを履き、終わったら手を洗うようにとの指導もしているが、なかなかね。」と、特に直接言葉の通じるベンガル人の、他の団体のボランティアたちは言う。日本人の発想としては、相手が多数なのだからわかりやすいポスターを、ということになるが、ここでふと見渡してみると、なるほど大小いくつかのキャンプを訪れてみたが、難民向けのポスターはただの1枚も無い。「ロヒンギヤは字を読めないから。」「何度言っても衛生観念がないから。」などがバングラデシュ人の共通の認識のようである。ロヒンギヤに関する文化人類学的な調査は我々も含めて著しく不十分である。

(第3種郵便物認可)

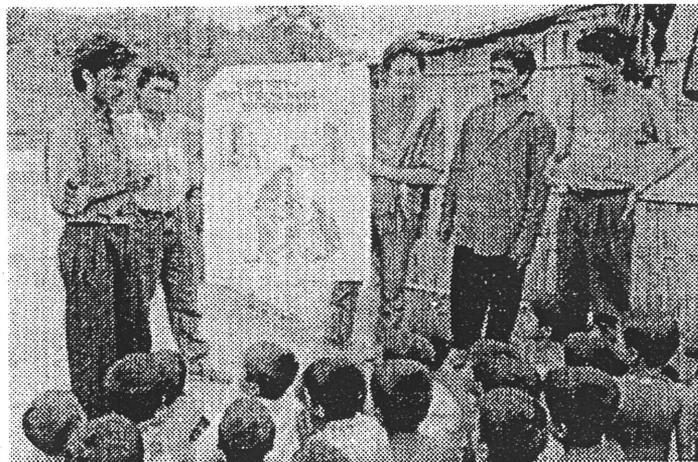
毎日新聞 (夕刊)

救えミャンマー難民

福岡出身 医師の卵 頑張る

ミャンマー(旧ビルマ)の軍事政権に耐えきれず、隣国バングラデシュに流れ込んだミャンマー難民の国際救援隊で一人の日本人ボランティアが活躍している。日本を含むアジア十三カ国の医師らでつくる非政府組織(NGO)、「アシ

ア医師連絡協議会(AMD A)の岩永資隆さん(三)がバングラデシュを卒業、医師国家試験の準備中だが、AMD Aがバングラデシュ人医師を中心組織した緊急救援チームに参加。先月末のキャンプ入り後は、医師のアシスタントに従事する一方、衛生知識の乏しい難民に「トイレの後は手を洗おう」「川や池の水を飲まないように」など衛生教育にも力を注いでいる。



ミャンマー難民の子どもたちに衛生指導をする岩永資隆さん(中央)



ミャンマー難民のキャンプが集まる地域

ミャンマー

バングラデシュ

インド

ダッカ

チッタゴン

ベンガル湾

を卒業、医師国家試験の準備中だが、AMD Aがバングラデシュ人医師を中心組織した緊急救援チームに参加。先月末のキャンプ入り後は、医師のアシスタントに従事する一方、衛生知識の乏しい難民に「トイレの後は手を洗おう」「川や池の水を飲まないように」など衛生教育にも力を注いでいる。

難民は大部分がイスラム教徒の少数民族、ロヒンギヤ族で、ミャンマー西部に住んでいたが、ミャンマー軍の展開で家を追われた。昨年暮れから急増し、現在、バングラデシュ最南端の十九のキャンプに約二十七万人が収容され、雨期の豪雨と病魔にさらされている。こうした難民の救援活動は、二千人を超える欧米のボランティアと、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の手で行われ、一週間で一人当たり米五〇〇、豆六〇、塩五、油二〇が配給される。

岩永さんは「日本がアジアのリーダーを自任するなら、こうした人々の現実にももっと関心を」と話した。

92/11

【ロヒンギャの見た日本人】

「アリガトホー！」 Dechuapalong-1 Camp で1日の活動を終え、帰ろうとした私の肩に手を置いた70才過ぎの老人が叫んだ。「先の戦争の時、日本の兵隊がビルマに攻めてきたのを見たが、あの時の日本人は皆背が低かったのに、なぜあなたはこんなに背が高いのか？」私は174cmであるが、戦中の日本人だと165cmあれば高いほうであっただろう。

Haludiapalong Camp で、60才を過ぎたと思われる人たちにスタッフの通訳を介して（一人だけ英語のわかる老人が居て、直接語ることができた）、やや恐る恐る戦時中の日本軍のことを訪ねてみた。「恐る恐る」というのは、韓国やフィリピン、シンガポールなどで旧日本軍による残虐な行為を忘れない老人が多く居ることを知っているからである。しかし、ロヒンギャの老人たちは、「日本軍はよく戦いました。私たちはあるとき、日本軍が英国の戦闘機を撃墜するのを見て楽しみました。」「私は日本軍に雇われて防空壕を掘りました。」「私も日本軍に雇われていました。あの時18才でした。」「私など懐かしそうに話し、「ドモ、アリガトー！」「コンニチワ！」など、片言の日本語まで話し、よくも50年間も忘れずにいたものだと感心させられた。日本軍はビルマでは英国軍と戦ったが、ロヒンギャが住むような旧英領印度国境付近の住民を、力づくで支配するようなことはなかったであろう。しかし彼らの出会った日本兵は地理的に見て例の「インパール作戦」に参加した兵士たちであったはずであるが、「ビルマの豎琴」にあるような悲惨な目に会ったことであろうな、などと思っているうちに、おもしろいことがわかった。スタッフが、「この人は日本人ですよ。」と、私を指して言ったのに対し、周りの人々が「エッ！」という表情を示したのだ。それは「残忍な日本人」に対する警戒の空気ではなく、緊張が一度に解けるような雰囲気である。「ビルマ人ではないの！」なるほど、キャンプに入る度に私に向けられるやや硬い感じの視線は、単に見慣れない外国人に対するものではなかったのだ。それまでも3回ほど、英語で「ビルマ語がわかるか」と聞かれたり、いきなりスタッフも理解できない言葉（ビルマ語であつたらう）で話しかけられたりしたが、まるで気にしていなかった。（というのも、私は日本にいてもフィリピン人やマレーシア人に間違われることがあるからである）しかし彼らにとっては、キャンプにビルマ人が来るというのは多に緊張を伴うことなのであろう。今後、同プロジェクトに参加される方には憶えておいていただきたいことである。

【ロヒンギャの子供たち】

とにかく数が多い。一家族あたり4～6人、ときには8人も9人も子供がいる。キャンプの住居は竹を編んで作った長屋が一般的である。一軒の長屋は六畳程の広さに仕切られ、それぞれに一家族が住んでいる。一軒の長屋に数家族から10家族ほどが住んでいるから、朝、キャンプに着いて活動の準備をしていると、だんだん人、と言うよりも子供たちが増えてきて、さてと思って見回すとドヤドヤと数十人の子供たちに囲まれていることがある。「ホラホラ！」と、長屋ごとに決められているリーダーが細い竹の棒で人込み、ならぬ子供込みの整理をしてくれる。日本から持参した「ハンマーパンチ」という、赤いプラスチック製の、叩くと「ピッ」と音のするおもちゃのハンマーを貸してあげると、これは大いにうけた。叩かれると皆喜んでいる。

衛生教育を始めるのであるが、最初は大きなボール紙に描かれた絵を見せて説明し、終わったらその絵は丸めてその辺に置いておいた。そのうち、子供たちがそのボール紙を少し広げて絵を覗き込んでいるのを見つけた。実はその絵というのがよく描けているなど思っていたら、コーディネイターであるラジャック氏の母校のチッタゴン・アート・カレッジの後輩たちに描かせたものだという。なるほど。そして難民キャンプとは何の娯楽もないところなのである。テレビはもちろん、マンガもおもちゃもない。たまにビー玉を持っている子がいるが、多くは土を丸めて乾燥させたものでビー玉遊びをしている。カラフルで写実的なポスターはもう少し眺めていたくもなるであろう。ボール紙の上部に竹の棒を取付け、紐を通し、さらにS字金具を買ってどこへでも下げられるようにし、絵の説明が終わっても帰るまではそのままにしておいた。これは子供たちだけでなく、大人にも興味を持ってもらえた。駆虫薬の投与中にもポスターの前に人が集まれば、「さっきの説明は聞いてましたか？」と話しかけ、また説明をして、より多くの人たちに衛生教育を行うことが出来るようになった。ポスターの絵は「トイレに行く前と食事の前には手を洗いなさい」とか「川の水は直接飲んではいけません、飲む前に煮沸するか、浄化剤を入れてから飲みなさい」などといった内容なのであるが、それぞれの絵の上にベンガル語で簡単な説明が書かれてあつた。ロヒンギャはビルマ語を読める人が多いと知ると、若い難民の一人に頼んでビルマ語の説明も書き加えてもらった。

学生の時、台湾の台北医学院の医療服務隊に加わり、そこの衛生教育に関心したことがあつた。主に糖尿病と高血圧に関する知識の普及が目的であつたが、まずスライドを見せながら説明し、それが終わるとまた同じスライドを見せて簡単な質問をし、手を上げて正しい答を言えた人に賞品をあげる

というものであった。我々はポスターを見せながら同じように簡単な質問をし、賞品として小さな石鹸や日本から持参したビー玉（「クリスタルボール」という名のキラキラのビー玉。ハイドロカルチャーに使う）、ゴム風船などをあげた。ゴム風船を賞品にすることを思い付いたのは、キャンプ内で時々子供がやたら大きいピンク色の風船を膨らませて遊んでいるのを見かけ、よくよく見るとそれが Condom であったという驚きからである。「子供は遊びの天才」という言葉が思い出された。

【今後に向けて】

初めての難民キャンプでの体験であった。目の前で人がばたばたと死ぬような所かと覚悟して行った（特に雨期はひどくなると聞かされていた）が、一月半の間に死人を見ることはなかった。現在キャンプで必要とされるのは、死を見つめるより、何も無い所で退屈している10万人の子供たちに楽しい思いをさせ、字を覚えることに興味を持たせ、将来に希望を抱けるように導ける、明るい人である。現状が悲惨であるからといって悲観的になってはいけない。

難民たちのミャンマーへの帰還は、現地の新聞等の情報などからしても相当先のことになりそうである。現在私が心配しているのは病気等のことではなく、キャンプ内での不穏な状況、つまり難民間のドンパチである。初めは1つのキャンプだけであったが、最近はおちこちに飛び火している。

帰国してから、何を見るに付けてもキャンプのことを思う日々である。また機会を与えられれば喜んで行きたいと思っている。



キャンプ内の井戸水は貴重な水源です

97/11

ミャンマー難民アンケート調査

Haludiapalong Camp, Ukhya, July 31, 1992

岩永 資隆 (AMDA, Japan)

Dr. Sumana Barua (Department of Community Medicine,
Institute of Applied Health Sciences, Chittagong)

S. A. Razzak (AMDA, Bangladesh)

Md. Nurullah (AMDA, Bangladesh)

Md. Zonaed (AMDA, Bangladesh)

目的

文盲率が高いといわれるミャンマー難民 (ロヒンギャ族) において、文字によるコミュニケーションの可能性と、その場合の適切な言語を選定すること。

有効な文字言語があれば、ポスター (現在、全てのキャンプにただの1枚もない) やパンフレット等による効果的な衛生指導・衛生教育、あるいは生活一般に関わる広範な情報の伝達が可能になる。

調査人数

男	16才～85才	92人
女	18才～60才	29人
計		121人

調査方法

個人面接による聴き取り。

バングラデシュ人のヘルスワーカーがベンガル語で行った。

調査票

(1) ① male

② female

(2) ① age

(3) ① Bengali আপনি কোন ভাষায় লিখতে পারেন?

Which language do you read ?

- ② Burmese
- ③ English
- ④ Arabic
- ⑤ Urdu
- ⑥ others (mention if any)

(4) ① Arakan আপনি কোন জায়গা থেকে এসেছেন?

Which part of Burma do you come from ?

- ② Buthidaung
- ③ Maungdaw
- ④ Rathedaung
- ⑤ Akyab
- ⑥ other area (mention)

(5) How many years of schooling did you finish ?

- আপনি কত বছর স্কুলে পড়াশুনা করেছেন ?
- ① primary ----- 5 years
 - ② high school ---- 10 years
 - ③ college ----- 12 years
 - ④ others (mention)

(6) ① yes আপনার কি কোন ছেলে/মেয়ে আছে ?

Do you have any children ?

- ② no

if (6) ① yes,

(7) আপনার কত জন ছেলে/মেয়ে আছে ?

How many children do you have ?

(8) Do you plan to give any education to your children if there is a chance ?

- আপনার (পুত্র কি মেয়ে) আপনার ছেলে/মেয়েদের (শিক্ষা) দেওয়া কি পরিকল্পনা করেন ?
- ① yes
 - ② no

if (8) ② no,

(9) কেন ?

Why ? (mention)

92/11

主な結果

読解可能言語 (第一言語はベンガル語)

男 ビルマ語 47.8% (18才から60才まで読解可能者がいる)
ベンガル語 3.2%

女 ビルマ語 10.3%
ベンガル語 3.4%

文盲率 (読解できる言語が何もない)

男 40.2%
女 79.3%

就学期間0年間 (学校に行かなかった)

男 43.5%
女 79.3%

まとめ

ロヒンギャ族の本来の居住地であるミャンマーにおける生活に関する資料が皆無である状態での調査である。ミャンマーという国自体が発展途上国であり、特に農村における教育の普及率はさほど高くはないと思われるが、ロヒンギャ族(推定人口約150万人)はそのミャンマーでもさらに地理的に辺境地域であるアラカン州に主に居住し、人種的・言語的にも、また宗教的にも少数民族であり(英国による植民地化以前は「アラカン・モスリム王国」という独立国家であった)、しかも反政府独立運動が根強いので、ミャンマー政府からは国籍さえも与えられていない存在である。日本で聞いていた、「文盲率94%」という事実は、我々が衛生教育に使用した大型のポスターに書かれたベンガル語による説明に対する反応や、子供たちの正確な年齢を憶えていない親が多数居ることなどからも納得できた。しかしある日、そのポスターを見ていた数人の10代の難民の一人に、「これ読める?」と訊いたところ、「読めない。」ああ、やっぱり。しかし、そのあとの一言、「でもビルマ語なら読めるよ。」この言葉に、なるほど、もしミャンマーで教育を受けたとすると、それはビルマ語による教育であるはずだと思いつき、その普及率を調査し、ビルマ語が情報伝達手段として有用な言葉であるか、あるいは他に有用な言葉があるのかを探ろうという気になったのである。

結果としては、やはりビルマ語が、読解できる者の一番多い言語であることがわかったが、その割合(男性47.8%、女性10.3%、総合38.8%)は当初の予想より高いものであった。平たく言えば、ビルマ語によるポスターなどの内容は、10人のうち4人には理解してもらえ、残りの6人もその4人から教えてもらえるということである。この40%近い数字は、バングラデシュの農村におけるベンガル語の識字率と大して変わらないものであるはずである。しかもビルマ語の読解可能者を、男性の年齢別の分布で見ると、10代から60代までにわたっており、情報が、ある特定の年齢層以外には伝わらないということのないことを示している。

ここで女性についてであるが、一般にイスラム教の社会では女性の地位が低く、教育の普及率も男性ほどではないことが多い。特に農村ではその傾向が強いことは容易に理解できる。今回の調査でも、男性の文盲率40.2%に比べ、女性の文盲率は79.3%と、実に倍近いものがある。ただし、この調査における女性の数は29人とかなり少ない。調査にあたったヘルスワーカーが全員男性であったため、女性に話しかけるのがやや難しかったのである。(男性は、女性が居る難民の住居には入れない)このような社会での調査の際には、女性の調査員も居ることが望ましい。また、結果が男女でかなり開きがあるので、対策も男女分けて考える必要がある。幼児や女性固有に関する衛生的な知識は、文字での普及は不可能と考えて、女性だけを集めて、しかも女性のヘルスワーカー等が指導にあたる、といった対応が必要である。

読解可能者が比較的多いアラビア語は、madras と呼ばれる、主にコーランを教える宗教的な塾で学習されているものである。「アラビア語の新聞は読めるか?」との質問には、「新聞は現代用語が

多くて理解できない。」とのことであり、コミュニケーションには不適切である。

ウルドゥ語は現在のパキスタンと、インドの一部の州の公用語であり、東パキスタン時代（1947年～1971年）の現在のバングラデシュ地域でも公用語であった。しかしその当時でも一般のベンガル人の第一言語はベンガル語であったことをあわせて考えると、ビルマ（当時）領内に居住していたロヒンギャ族がウルドゥ語を理解できるほどの、国境を越えた政治的あるいは文化的な影響力があったものと考えられる。ウルドゥ語はアラビア語と共通な文字を使用する言語であるので、アラビア語を学習した者には比較的取得が容易であるということもその普及の理由の一つである。

アラビア語及びウルドゥ語を情報伝達手段として使用するのには、言語としての理解度や浸透率などとはまるで違う次元で無理な理由がある。あるキャンプで発生した難民間の発砲事件が飛び火する形で数箇所のキャンプに拡がっているが、この事件の素は、現地の新聞に報道されたところによると、一部のイスラム教系のNGOが難民たちに密かに行った、イスラム教徒を迫害する仏教徒の国であるミャンマーへは帰るなどという説得に共鳴する派と、あくまでも自分たちの故郷へ帰ろうとする派（バングラデシュ政府ももちろんそれを望んでいる）との対立である。従って、キャンプ内においてアラビア文字による教育活動や広報活動を行うことは、不必要な、あるいは時としては身の危険を伴うような誤解の種になり得るのである。

次に、調査票で出身地を訊いた。地域によって教育の盛んな地域と、そうでない地域があるのかを調べるためである。

Buthidaung	男 64人	女 18人	計 82人
Maungdaw	男 27人	女 10人	計 37人
Rathedaung	男 1人	女 0人	計 1人
Akyab	男 0人	女 1人	計 1人

このうち Buthidaung と Maungdaw を較べてみると、（集団の大きさの差にやや問題はあがあるが）かなりの違いが見て取れる。

	就学期間0年	文盲率	ビルマ語識字率
Buthidaung 男	32.8%	31.3%	59.4%
女	66.7	66.7	16.7
Maungdaw 男	66.7	63.0	22.2
女	100	100	0

単にButhidaung が都市で、Maungdaw が農村なのか、ミャンマーの、特にアラカン地方に関する情報がほとんど無い現状では何とも言いがたいが、ロヒンギャ族も出身地域によって識字率に差がある、ということも知っておく必要があろう。

調査票の最後にある、「チャンスがあれば、あなたは自分の子供に教育を受けさせたいと思いますか」（子供があるという人にだけ訊いた）という質問には、見事に100%の人が“yes”と回答した。実はこれもあるとき40代の男性の難民に話しかけたことが動機である。彼は文盲であった。子供は5人。「子供たちを学校へやりましたか。」「いいえ。」「なぜ?」「ビルマではいくら学校へ行っても、イスラム教徒では良い職には就けないからです。学校へ行っても無駄になります。」夢も未来も無い話しであった。在日の韓国・朝鮮人の友人たちは、「日本では外国籍では公務員になれないから、自分たちは理系の学校に入って技術者になるか、芸能関係か、あとはスポーツ選手になるかだ。」と言っていたが、ミャンマーはそのような選択さえも無い社会なのであろうか。調査の結果としては意外と言ってもよいものである。「チャンスがあれば」と言う部分を大いに都合よく（ミャンマーで差別がなくなればとか、アラカンが独立すればとか）解釈したものかもしれないが。しかし、ベンガル語、ビルマ語、英語、アラビア語、ウルドゥ語と、調査した5ヶ国語全ての読み書きが出来ると答えた60才のイマム（宗教的指導者）は達者な英語で、「私はここのモスクで子供たちに、英語とアラビア語を教えている。ビルマ語も教えたいが、教材が無いし、金も無い。」と言ったので、「どうして第一言語であるベンガル語は教えないのですか。」と訊くと、「ベンガル語はビルマに帰ったら何の役にも立たない。」とのことであった。イマムの言葉は、必ずミャンマーに帰るという意志と、将来、子供たちが国に帰った時に役に立つように、という積極的な姿勢とが伺えた。

全出身地域

読解可能言語 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計	
人数(人)	7	30	30	14	6	4	0	1	92	
読める言語	ベンガル語	1		1		1			3	3.2%
	ビルマ語	2	18	15	3	5	1		44	47.8
	英語		3	2		1	1		7	7.6
	アラビア語	5	3	5		1	3		17	18.5
	ウルドゥ語	2	1	1	1	2	2		10	10.9
文盲	1	11	12	11	1	1		37	40.2	
文盲の割合(%)	14.3	36.7	40.0	78.6	16.7	25.0		0	40.2	

(注) 複数の言語を読解可能な者が居るため、各言語の読解可能者と文盲の数の合計は各年齢層ごとの人数を超えることがある。

就学期間 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計	
人数(人)	7	30	30	14	6	4	0	1	92	
0 (年間)	1	10	14	11	1	3			40	43.5%
1~2		1	4					1	6	6.5
3~4	3	11	7	1	1				23	25.0
5~6	1	5	2		1				9	9.8
7~8	2	2	3	2	1				10	10.9
9~10						1			1	1.1
11~12					2				2	2.2
13		1							1	1.1

子供の数 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計
人数(人)	7	30	30	14	6	4	0	1	92
0 (人)	7	15	2						
1~2		10	9	1					
3~4		5	11	4	1	2			
5~6			8	5	2	1		1	
7~8				3					
9				1	3	1			

読解可能言語 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	50	60	計	
人数(人)	6	9	9	2	2	1	29	
読める言語	ベンガル語		1				1	3.4%
	ビルマ語	1	1	1			3	10.3
	英語						0	0
	アラビア語	2					2	6.9
	ウルドゥ語			1	1		2	6.9
文盲	4	7	8	1	2	1	23	79.3
文盲の割合(%)	66.7	77.8	88.9	50.0	100	100	79.3	

(注) 複数の言語を読解可能な者が居るため、各言語の読解可能者と文盲の数の合計は各年齢層ごとの人数を超えることがある。

就学期間 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	50	60	計	
人数(人)	6	9	9	2	2	1	29	
0 (年間)	4	7	8	1	2	1	23	79.3%
1~2			1				1	3.4
3~4	2	1		1			4	13.8
5~6							0	0
7		1					1	3.4

子供の数 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	50	60	計
人数(人)	6	9	9	2	2	1	29
0 (人)	3	2			1		
1~2	3	5	1		1	1	
3~4		2	3	1			
5~6			5	1			

92/11

Maungdaw 出身者

読解可能言語 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計	
人数(人)	1	9	5	8	2	2	0	0	27	
読める言語	ベンガル語	1		1					2	7.4%
	ビルマ語		1	2	2	1			6	22.2
	英語								0	0
	アラビア語	1	1	1			1		4	14.8
	ウルドゥ語	1		1					2	7.4
文盲	0	7	2	6	1	1		17	63.0	
文盲の割合(%)	0	77.8	40.0	75.0	50.0	50.0			63.0	

(注) 複数の言語を読解可能な者が居るため、各言語の読解可能者と文盲の数の合計は各年齢層ごとの人数を越えることがある。

就学期間 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計	
人数(人)	1	9	5	8	2	2	0	0	27	
0 (年間)		6	3	6	1	2			18	66.7%
1~2			1						1	3.7
3~4		3	1	1					5	18.5
5~6					1				1	3.7
7~8	1			1					2	7.4

子供の数 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計
人数(人)	1	9	5	8	2	2	0	0	27
0 (人)	1	3							
1~2		5	2						
3~4		1	2	3	1	1			
5~6			1	2					
7~8				2					
9				1	1	1			

読解可能言語 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	50	60	計	
人数(人)	2	1	4	0	2	1	10	
文盲	2	1	4		2	1	10	100%
文盲の割合(%)	100	100	100		100	100	100	

就学期間 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	50	60	計	
人数(人)	2	1	4	0	2	1	10	
0 (年間)	2	1	4		2	1	10	100%

子供の数 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	50	60	計
人数(人)	2	1	4	0	2	1	10
0 (人)					1		
1~2	2	1			1	1	
3~4			1				
5~6			3				

92/11

Buthidaung 出身者

読解可能言語 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計	
人数(人)	6	21	24	6	4	2	0	1	64	
読める言語	ベンガル語					1			1	1.5%
	ビルマ語	2	17	13	1	4	1		38	59.4
	英語		3	2		1	1		7	10.9
	アラビア語	4	2	4		1	2		13	20.3
	ウルドゥ語	1	1		1	2	2		8	12.5
文盲	1	4	9	5	0	0			20	31.3
文盲の割合(%)	16.7	19.0	37.5	83.3	0	0		0	31.3	

(注) 複数の言語を読解可能な者が居るため、各言語の読解可能者と文盲の数の合計は各年齢層ごとの人数を超えることがある。

就学期間 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計	
人数(人)	6	21	24	6	4	2	0	1	64	
0 (年間)	1	4	10	5		1			21	32.8%
1~2		1	3					1	5	7.8
3~4	3	8	6		1				18	28.1
5~6	1	5	2						8	12.5
7~8	1	2	3	1	1				8	12.5
9~10						1			1	1.6
11~12					2				2	3.1
13		1							1	1.6

子供の数 (男)

年齢(才)	16~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	85	計
人数(人)	6	21	24	6	4	2	0	1	64
0 (人)	6	12	2						
1~2		5	6	1					
3~4		4	9	1		1			
5~6			7	3	2	1		1	
7~8				1					
9					2				

読解可能言語 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	計	
人数(人)	4	8	5	1	18	
読める言語	ベンガル語		1		1	5.6%
	ビルマ語	1	1	1	3	16.7
	英語				0	0
	アラビア語	2			2	11.1
	ウルドゥ語			1	1	2
文盲	2	6	4	0	12	66.7
文盲の割合(%)	50.0	75.0	80.0	0	66.7	

(注) 複数の言語を読解可能な者が居るため、各言語の読解可能者と文盲の数の合計は各年齢層ごとの人数を超えることがある。

就学期間 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	計	
人数(人)	4	8	5	1	18	
0 (年間)	2	6	4	0	12	66.7%
1~2			1		1	5.6
3~4	2	1		1	4	22.2
5~6						0
7		1			1	5.6

子供の数 (女)

年齢(才)	18	20~29	30~39	40~49	計
人数(人)	4	8	5	1	18
0 (人)	3	2			
1~2	1	4	1		
3~4		2	2		
5~6			2	1	